

八日に、白き大鷹を詠む歌一首 并せて短歌

四一五四番

あしひきの 山坂越えて 行き変はる 年の緒長  
く しなざかる 越にし住めば 大君の 敷きま  
す国は 都をも 二二も同じと 心には 思ふ  
ものから 語り放け 見放くる人目 ともしみと  
思ひし繁し そこ故に 心和ぐやと 秋付けば  
萩咲きにほふ 石瀬野に 馬だき行きて をちこ  
ちに 鳥踏み立て 白塗の 小鈴もゆらに あは  
せ遣り 振り放け見つつ 憤る 心の内を 思  
ひ延べ 嬉しびながら 枕づく つま屋の内に  
とぐら結び すゑてそ我が飼ふ 真白斑の鷹

四一五五番

矢形尾の 真白の鷹を やどにする 掻き撫で見  
つつ 飼はくし良しも